

# 「伝統的な言語文化」の授業実践における 独自性とは

——小学校・中学校・高等学校の国語科の中で——

岡 利 道

## 1 研究の意図

そもそも「伝統的な言語文化」に関する指導を重視する趣旨はどのようなものであろうか。

考えは多岐にわたるであろうが、文部科学省の見解に絞ってみると、小学校から中学校にかけてであるが、およそ次のようにまとめることができる<sup>1)</sup>。

学習材としての「伝統的な言語文化」は、古文や漢文等（以下、古典とする）を指す。

我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう、以下のように小学校から中学校へと内容を構成している。

小学校では、古典に親しめるようにすることを基本とし、例えば、低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げる。

中学校では、生徒が古典に一層親しめるようにするとともに、我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることを重視して指導する。例えば、第1学年では文語のきまりや訓読の仕方を知って音読すること、第2学年では古典に表れたものの見方や考え方に触れること、第3学年では歴史的背景などに注意して古典を読むことなどを取り上げる。

教材の構成は、生徒が古典の文章の内容を概括したり古典の文章に関する様々な事柄に触れたりすることができるよう、古典の原文だけでなく、分かりやすい現代語訳や古典の世界について解説した文章などを適切に取り上げることが必要とされる。

上記のうち、さらにそのポイントであると思われるところに、岡が下線を付している。要約すれば、以下の6点となるだろう。

- ア 小学校では、様々な種類の古典に親しむことが最も大切である。
- イ 中学校では、古典により一層親しむとともに、我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることをめざす。
- ウ 中学校1年では、文語のきまりや訓読の仕方を知って音読することを重視。
- エ 中学校2年では、古典に表れたものの見方や考え方に触れることを重視。
- オ 中学校3年では、歴史的背景などに注意して古典を読むことを重視。
- カ 最終的には、我が国の言語文化の継承、新たな創造へと方向づける。

岡としては、これらを高等学校での実践にもつなげて考えていきたいという問題意識を持っている。その意味において、高等学校の国語科では、扱う教材のレベルがさらに高まる中で、上記アからオまでの趣旨が完結することが求められると考えている。

これらのことを踏まえ、教育実践現場では、具体的な授業づくりに邁進しなければならぬだろう。実践の指針となる研究の一つとして、藤森（2014）が挙げられる<sup>2)</sup>。そこでは、「伝統的な言語文化」の独自性を持っていると言うことができる実践例を特定していき、その独自性そのものの内実を明らかにしようとしている。以下、岡が具体的にそこで述べられていることのポイントを抽出し、まとめたことを示す（表1参照）。

「対象とされた実践事例の一覧」における「事例等」の欄は、通し番号のあとに、学校種・学年、単元名、著者名、通巻番号：ページを記している。その下は、発行年月である。※は実践事実ではなく、提案であることを示す。また、「事例等」の右に続く三つの条件とは、次のとおり。

条件A：古典文学作品以外の言語作品や言語生活、言語そのものが対象として取り上げられている。

条件B：音声言語若しくは文字言語による表現活動が、単元設定の中で明確に位置づいている。

条件C：伝統と文化における当事者性が意識された目標設定となっている。

表1 対象とされた実践事例の一覧

事例等	条件Aとの対応	条件Bとの対応	条件Cとの対応	独自性についての説明
1 小六	『おもしろさうし』	歌謡の群読、歌謡	地域文化としての	ア 学習者の

<p>「あけもどろの花」 村上呂里 429：4-9 2008(H20)/1</p>	<p>巻七、三七九の歌謡（「あけもどろの花」と命名）を主たる学習材とし、沖縄の古語が表現する自然への賛歌を感受する学びである。</p>	<p>に出てくる語句の意味調べ、子どもたち自身による歌詞の「自分語訳」が行われる。</p>	<p>「しまくとぅば（島言葉）」への理解と関心を深めるという目標が設定されている。</p>	<p>生活する地域社会で生成され継承されてきた言語文化を取り上げている。</p>
<p>2 中一 「『語り』でつなごう ふるさとの心」 伊藤 究 429：16-21 2008(H20)/1</p>	<p>千葉県市原市の民話を集めた『市津の民話』を主たる学習材とし、テラプレーション（語りの祭典）に参加して地域に伝わる昔話の再話を行う学びである。</p>	<p>アニメーション、語りの脚本化、小学校や公民館での口演が行われる。</p>	<p>語りを通じてコミュニケーションについて学び、「話す・聞く」力を地域コミュニティを育む一歩とする。</p>	<p>ア 学習者の生活する地域社会で生成され継承されてきた言語文化を取り上げている。</p>
<p>3 ※ 小五 「こんな むがしっこ あったごさ」 工藤素子 441：10-15 2009(H21)/1</p>	<p>教科書教材「題材や表現に注意して一昔話をしようかいしようー」（東京書籍・五下）から拡大した単元として構想されている。『読みがたり秋田のむかし話』『秋田むがしこ』『昔語りの会』会員の語りを主たる学習材としている。</p>	<p>昔話のペア音読、紹介文の作成、昔話の語り聞かせ、調査報告、下級生や地域の方を対象とした昔話の語り聞かせや紹介が行われる。</p>	<p>「むがしっこ（昔話）」に受け継がれている人の願いや思い、教え等と温かさに触れるとともに、「今度は自分が伝えていく役になる」という意欲を持って、本を読んだり自分の考えを広げたり深めたりする姿勢を育むことが目指されている。</p>	<p>ア 学習者の生活する地域社会で生成され継承されてきた言語文化を取り上げている。</p>
<p>4 小六 「絵本と古典の話を読み比べてみよう」 大森和彦 452：10-15 2009(H21)/12</p>	<p>『御伽草子』、『宇治拾遺物語』から「浦島太郎」、「一寸法師」などの有名な昔話を抜粋し、同名の絵本を提示して両者の内容を比べる学びである。</p>	<p>古典作品の原文音読、古典作品と絵本の比べ読み、紹介文の作成が行われる。</p>	<p>自分たちが知っている話が古典ではどのように書かれているのかに興味を持つことで、古典に親しむ態度を育てることが目指されている。</p>	<p>イ 現代を基準に過去の言語文化を見つめる活動が一貫している。</p>
<p>5 ※ 中学 「自称代名詞」 世羅博昭 460：4-9 2010(H22)/8</p>	<p>「わたくし・わたし・あたし・ぼく・おれ」などの自称代名詞を素材とし、英語では「I」一語であることの違いを考察する学びである。</p>	<p>自称代名詞の用例の出し合い、意味用法についての話し合いなどが行われる。</p>	<p>相手との関係を尊重する日本人の精神性に気づかせ、そのような日本語をどう考えるかを話し合う力を目標に置いている。</p>	<p>ウ 学習者の使用言語における語彙体系を、アあるいはイの要素によって拡充・深化することが目標とされている。</p>
<p>6 小四</p>	<p>『学習慣用語句辞』</p>	<p>教科書「慣用語」</p>	<p>「慣用語」に対す</p>	<p>イ 現代を基</p>

<p>「ことばに出合う」 米田直紀 478：10-15 2012(H24)/2</p>	<p>典』（三省堂）を用いて、生活場面で使用される慣用句について学ぶ単元である。</p>	<p>（光村図書・四下）の読解、辞典を使って各自が調べた慣用句のクイズが行われる。</p>	<p>る印象を、古人が作った遠い存在というものから自らの言語生活に息づいているものへと変えることが目指されている。</p>	<p>準に過去の言語文化を見つめる活動が一貫している。</p>
<p>7 中学全期 「発見を伝え合うことで漢文に親しむ学習」 数井千春 478：16-21 2012(H24)/2</p>	<p>万葉歌、『朗唱漢詩漢文』を主たる学習材とし、「自分の発見」を経験する学びである。</p>	<p>クイズ、漢語や漢文の語構成についての問答、二十編の漢詩のテーマ分類、鑑賞文の制作と交流、文集の作成等の活動が、学年段階に沿って展開する。</p>	<p>漢文の面白さを自分で発見し他者と伝え合うことで、古典に親しむ態度を育成し、今の自分の生き方や社会の在り方を考える契機とすることが目指されている。</p>	
<p>8※ 中高 「連句の系統的な指導」 石塚 修 497：4-9 2013(H25)/9</p>	<p>各務支考が考案した連句形式「短歌行」を主たる学習材とし、想像力をはたらかせながら連句創作を楽しむ学びの提案である。</p>	<p>芭蕉の鶉飼いの句を素材にして発句の5W1Hを推定・想像する活動を導入とし、四名を基準としたグループでの連句創作活動が行われる。</p>	<p>ことばが「場」において機能することを深く理解し、ある語句が「場」を変えたときにどのような意味として機能し、効果的に使えるのかを意識化されることが目指されている。</p>	<p>ウ 学習者の使用言語における語彙体系を、アあるいはイの要素によって拡充・深化することが目標とされている。</p>
<p>9 小三～四 「よもう・つくろう・楽しもう！ 日本語大すき」 矢野万理 497：10-15 2013(H25)/9</p>	<p>『江戸・上方いろはかるた』、『北九州市ふるさとかるた』を中心的な学習材とし、郷土の言葉やことわざ、俳句に親しむ学びである。</p>	<p>各地の「いろはかるた」を使った遊び、自己の学びを自ら記録し設計する「日本語大好き」ノートの作成、自分たちの町の風物を紹介する「穴生いろはかるた」の制作、郷土俳句の鑑賞が行われている。</p>	<p>「日本の心・日本のことば」に対する関心と理解を深め、ふるさとを愛する心を持てるようにすることが目標に据えられている。</p>	<p>ア 学習者の生活する地域社会で生成された言語文化を取り上げている。</p>
<p>10 中二 『『平家物語』の列伝をつくらう』 野崎真理子 497：16-21 2013(H25)/9</p>	<p>『平家物語』（講談社学術文庫）、『吉村昭の平家物語』（講談社）、教師の作成した「列伝」見本を主たる学習材とし、古典に表れた登場人物を想像することに重点を置いた学びである。</p>	<p>現代語訳による作品の通読、登場人物の関係やプロフィールをマッピングする「人物解釈シート」の作成、人物の解釈・評価にかかる語彙表を参照した列伝の作成等が行われる。</p>	<p>自分の生き方に照らして人物を評する語彙と表現力の獲得が目指されている。</p>	<p>イ 現代を基準に過去の言語文化を見つめる活動が一貫している。</p>

ここでは、「伝統的な言語文化」の独自性を持っているとすることができる実践例を、「月刊国語教育研究」誌に発表された実践例から探索されている。範囲は、2013年12月号（通巻500号）までである。条件A・B・Cを満たしている実践例が、上の10種というわけである。

表中の右端の欄に示したア・イ・ウの項目が、「伝統的な言語文化」の授業実践における独自性の内実である。とりわけウは、総合的に見てより優れたものだと結論づけられている。（この体系的な表の内容を以下、「藤森の体系化」と略記する。）

なお、全体をトータルして結論づけられたことは、次の枠内のものである。（原文のまま示す。）

## 五 結論

「伝統的な言語文化」の独自性として、全ての教育課程において普遍的な要素は指摘するに至らなかった。ただし、多くの実践例には次の要素が共通して見られ、これが当該指導事項の独自性を保証すると考えられる。

すなわち、学習者の生活圏における言語文化を取り上げたり、現代の視点から過去の言語文化を見つめる活動を一貫させたりすることによって、学習者の使用言語における語彙体系を拡充・深化することが目標であることである。

岡としては、この意図を認めつつ、まだ継続して検討していく必要があるとの考えに立ち、これらの成果をこのテーマに関しての暫定的な結論（以下、「藤森の結論」と略記する。）と見なし、次の「研究の目的」につなげ、発展させたいと希望するものである。

## 2 研究の目的

藤森（2014）が主張するところの、“「伝統的な言語文化」の独自性を把持している実践とは、学習者の生活圏における言語文化を取り上げることにより、または、現代の視点から過去の言語文化を見つめる活動を行うことにより、学習者の使用言語における語彙体系を拡充・深化することを目標として展開されているものである。”との見解を支持する実践が継続して見出されるか、全体を通して特徴的なことは何かについて検討することを、本研究の目的とする。

### 3 研究の方法

藤森（2014）が調査対象とした期間からあとであるところの、2014年（平成26年）の1月から12月までの「月刊国語教育研究」誌を同様に調査対象とする。先の「藤森の体系化」の条件を満たすとと思われる実践事例が見出された場合は、各観点に応じて内容を記述する。そののち、全体を見渡し、先の「藤森の結論」が支持されるかどうか、また、新たに見出されることはないかどうかを検討する。

### 4 研究の結果

前掲の表1の書式に従い、先の「研究の方法」で示した内容を記述し、表2としてまとめる。

表2 新たな実践事例

事例等	条件Aとの対応	条件Bとの対応	条件Cとの対応	独自性についての説明
11 小六 『『たのしみ』という語彙による短歌の指導例』 鶴巻景子 501：13-15 2014(H26)/1	『独楽吟』（教科書教材）を主たる学習材とし、短歌の学習を通して古典に触れ、日本語のこれまで培われてきた言葉の豊かさや、日本人古来の言語感覚を理解し、自らの言葉の感覚を磨いていくという学びである。	橘曙覧の『独楽吟』から三つの歌をよみ、作品の共通性やイメージを話し合う、日常生活における「たのしみ」な場면을短い文章で表現する、短歌をつくり歌会をするといった活動が行われる。	選んだ歌の鑑賞文を書くことでは、歌に込められている人の心や光景をしっかりとつかみ、歌の実作では、『独楽吟』の語彙に学び、表現を吟味して書くことで、主体的に言葉の感覚を磨いている。	ウ 学習者の使用言語における語彙体系を、アあるいはイの要素によって拡充・深化することが目標とされている。
12 小五 『ようこそ古典の世界へー『竹取物語～かぐや姫の生立ち～』を読み解こうー』 熊谷 尚 506：58-63 2014(H26)/6	『竹取物語』（ビギナーズ・クラシックス日本の古典・角川書店編）及び同絵本を主たる学習材とし、古語も現代語も繋がっているとの考えに立ち、古典の「面白さ」の体験を推進力として作品を読む力を身につけていくという学びが構想されている。	原文の個人音読や聞き合い、原文と絵本の対比から考えたことのノート記述が取り入れられている。また、語句の表現（名前の呼び方・特定の語のあるなし）に着目させ、グループで、あるいは全体で話し合い活動を展開している。	古典は特別なものであり、音読・暗唱することが「親しむ態度」を育成するのだと偏狭な捉え方になることを避け、普段学んでいる物語と同じように、読みの指標や方法を明確に持って読み、学ぶことの意義を理解し、主体的に学ぶことが目指されている。	イ 現代を基準に過去の言語文化を見つめる活動が一貫している。

<p>13 小六 (1)「書き手の立場になって作品を味わおう」(2)「書き手と自分のものを見方を比べよう」 立石泰之 509:10-15 2014(H26)/9</p>	<p>芭蕉作「閑かさや」の句をめぐる一連の推敲過程、『徒然草』「友とするに悪き者」の段を主たる学習材とし、書き手の推敲の追体験をしたり、「友」という存在をどう見るか・考えるかを追究したりする学びである。</p>	<p>各句や『徒然草』本文・補助資料の音読、推敲の順序とその理由のノート記述・意見交流などをする中で、子どもたちが書き手の制作過程を追体験すること・なりきることが大切にされている。</p>	<p>芭蕉の推敲過程を辿りつつ俳句の持つ言葉の響きの美しさや作品に流れている主題について考えたり、本文や補助資料から兼好が当時何を見、どう考えたか想像したりするという、体験的な学びが目指されている。</p>	<p>イ 現代を基準に過去の言語文化を見つめる活動が一貫している。(『徒然草』→(2)の実践の場合)</p>
<p>14 中学全期 「七夕単元—文化的行事を文学としてたどる—」 森 顕子 509:16-21 2014(H26)/9</p>	<p>教科書教材「七夕におもう—語り継がれ、読み継がれてきたもの—」、「牽牛織女伝説」、『懐風藻』、『万葉集』を主たる学習材とし、現在の文化的行事である七夕を、文学として認識する(古典学習の串とおく)という学びである。</p>	<p>「たなばたさま」の唄と一緒に歌う、既知の物語・伝説としての七夕について記述・発表する、天体(夏の大三角形)の面での関連を知る、古代中国の伝説をプロット分けする、短冊に願い事を書くなどが行われる。</p>	<p>何となく行ってきた年中行事・七夕が、中学校三年間にわたる帯単元(季節単元)を経る中で、意味付けされていき、原点・ルーツを知ることができていき、季節感や行事を大事にする心情が養われる。</p>	<p>ウ 学習者の使用言語における語彙体系を、アあるいはイの要素によって拡充・深化することが目標とされている。</p>
<p>15 高二 「小倉百人一首を用いてプレゼン勝負!—歌合を楽しもう—」 奥村準子 509:22-27 2014(H26)/9</p>	<p>古典を学ぶ意義について説明された自作のスライド資料、小倉百人一首(生徒自身が調べたものと教師が提示した「番(つがい)の歌14首」)、『天徳四年内裏歌合(絵巻)』を主たる学習材とし、体験的活動を多様に取り入れた学びである。</p>	<p>好きな一首について詞書と部立に着目して調べてレポートにまとめること、ペア・グループでの話し合い・プレゼン・評価活動をする、担当の歌を現代語(チョコレート語)訳することなどが行われる。</p>	<p>古典を学ぶ意義そのものを認識し、自分の読書生活に繋げたり、作者の伝えたい歌のメッセージを、文献引用を踏まえて自分たちの言葉で説明したりする中で、言葉や表現の本質を見つめようとする姿勢を育むことが目指されている。</p>	<p>ウ 学習者の使用言語における語彙体系を、アあるいはイの要素によって拡充・深化することが目標とされている。</p>

## 5 考察・課題

「藤森の体系化」に従うと、2014年(H26年)1月から12月までの「月刊国語教育研究」誌に発表された論文からは、表2に挙げられたように、通し番号11から15の実践が見出された。よって、「藤森の結論」は、暫定的なものではなく、おおよそ妥当であると考えられる。条件に足る、優れた実践事例がトータルで15事例(小

8・中高7) あることは、指導者にとっても学習者にとっても喜ばしいことである。「月刊国語教育研究」誌だけに限らず、対象範囲を広げれば、さらに同様な事例は多く見つかるであろう。参考になる、私たちの共通財産としたいものである。

いくぶん気にかかることは、事例1の『おもしろさうし』に代表されるような、地域に根ざした歌謡、民話、伝説等の教材が使用された事例が見出せなかったことである。このことは、新たに開発していき、ストックしていくことの必要性を示す証左となるだろう。

同時に、今後の課題として捉えることもできるだろう。即ち、地域に根ざす教材であることが、古典あるいは「伝統的な言語文化」に親しむにふさわしいものであるという、そのままイコールの関係となるかどうかは慎重に検討すべきだということである。自地域ではない他地域のものを使う場合に、特に問題となると考える。この領域を学ぶ意義と関わって、当事者性の達成度の問題とも重なるだろう。

ただし、これらの課題は、これまで見てきた一連の研究の趣旨とは性格を異にするものである。事例ごとのより細かな分析を経て分かるのではなからうか(設定された条件や基準に達しなかった事例も含めて)。また、成果物や学習者の評価結果が有効な資料として随伴する研究を、新たに起こさねばならないかもしれない。この面については、他日を期したい。

## 注

- 1) 文部科学省のホームページの「学習指導要領 Q & A」に、まさにこの問題が取り上げられている。
  - 2) そこでは、「伝統的な言語文化」に関する基本認識として、次の三点が掲げられている。
    - ①歴史的に評価の定まった古典文学作品の読解・鑑賞に留まるのではなく、古典について解説した近現代の文章、学習者の言語生活、及び言語現象そのもの等をも学びの対象としていること。
    - ②「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の諸活動が必然的動機を伴って展開する学習指導を実践すべきだという意図。
    - ③地域の伝統や文化との触れ合いを通して、日常生活を豊かにするとともに、地域社会への帰属意識を高め、世代の異なる人や郷土を愛する心を育むために必要な言語活動力。
- すなわち、近現代の文章や日常生活から収集された学習材を積極的に活用して、学習者自身が当事者となるべき伝統や文化を体験的に学ぶことが、「伝統的な言語文化」の基本認識となっている。



参考文献・URL

藤森裕治. 2014. 「伝統的な言語文化」の独自性. 月刊国語教育研究. No. 508 (H26/12). pp. 4-9.

文部科学省. “現行学習指導要領・生きる力 Q & A 2. 国語に関すること (小・中学校 問2)”. (オンライン). 入手先 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/qa/02.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/02.htm)>, <入手 2015-02-02>.

(本学教授)